

# とある転生者の音楽目 録

echo21

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

元オッサンと今オッサンが出逢うとき、音楽は交わる——NO MUSIC, NO  
LIFE

# 目次

M	usic	Star	Channel	01	9	オレの保護者になれ事件。	No.	01
M	usic	Star	Channel	02	19	オレの保護者になれ事件。	No.	02
M	usic	Star	Channel	02		オレの歌を聞け事件。		
M	usic	Star	Channel	03		オレの歌に酔え事件。		

M	usic	Star	Channel	04	オレの夏祭り事件。			
M	usic	Star	Channel	05	88	76	68	



# M u s i c S t a r C h a n n e l 0 1

「はい、どうも☆ ついに始まつてしまひました。記念すべき第一回の生配信、Music Star Channelのお時間です。なんでここにいるのかよく分かつてない、Roseiliaのベース、今井リサでーす☆」

「ういーす。ヒデビーす。いろんな音楽やつてまーす。リサちーのお母さんみてるー? 不倫しようぜつ」

「ぶん殴るぞ? てかさ、アタシね。この番組が何をするのかよく分かつてないから、まじめに教えてくれる?」

「あいあい。毎回リサちーとオレがMCを担当してうちの事務所、Music Star Productionに所属しているアーティストとか、オレが楽曲を提供してい人たちをゲストに呼んで……」

「呼んで?」

「駄弁る。ぐだぐだする。なんならやる?」

「ぶん殴るぞ? .....え、なに? これを読めばいいの? ——ベンネーム、まん丸お山さん。初の生放送おめでとうございます。『ありがとうございます。生配信だけどねー』ヒデくん

に質問できるときいてメールしました。『ほいさ』どうしてアイドルをプロデュースしないんですか？『アイドルはよくわかんないんだー』それにそれに、熟女好きって本ですか？『うん。リサちーのお母さんが好みでつせ』ぶん殴るぞ？丸山彩ちゃんをプロデュースするとしたらどうしますか？ヒデくんのプロデュースで、めっちゃアイドルしたいです。だつてさ』

「もう答えたじやん」

「笑つてんじやないわよ。……てかさ。彩ちゃん自白してるよね？」

「してるなー。事務所違うけど大丈夫？ 湊のオツサン死んでる？」

「湊社長は生きてまーす☆ 次のメール？ こんな感じでいくんだ。これつて生配信のラジオじやん。——ベンネーム、るんつてきた！ さんからのメールです。最近遊んでくれないのはなんでだろー？ スケジュール教えてー『嫌でーす』だつてさ。……これ、いいの？ パスパレ大丈夫？」

「大丈夫だ。問題ない」

「いやいや問題でしょ。なに読ませてんのよ。本当にこんな感じでいくの？ 初回だよ？ あ、はい。次のメールね。——ええつと、こほん。ベンネーム、白い鷺さんです。初の生配信、おめでとうござります。『ありがとー』先日の単独ライブ、お疲れ様です。『どもー』新しいドラマが始まります、新曲の提供ありがとうございます。『リサちー？』

待つて、一応最後まで読むから。……え、と。単独ライブのアンコールで歌つた曲も使いたいのですが、雰囲気の似た曲はいくつありますか？ だつてさつ

「あかんやろ、これ。事務所通せよ」

「だよね。事務所でやつてよ」

「白鷺よお。あかんぞ。アンコールの曲を誰にも使わせないから似た曲つて、お前……」「名前、名前。名前いつてるから」

「リサも彩とかパスパレいつたじやん」

「いや、だつてさあ。仕方なくない？ え？ 次回のゲストがパスパレ？ ……え？」

「いいんだ。みて、ヒデ。あそこで湊社長がオッケーしてる」

「あ、そうなの。ならいいわ。後で会議だから逃げんなよ、オッサン」

「次回かあ。今回じゃないんだね。初回のゲストはいないの？ ……いないんだあ」

「いないらしいよ。つかさ。オレがテレビとか雑誌の露出がないからつて、次回ゲストからの質問つてアリなの？」

「普通は一般、ファンからくるよね？」

「あ、きてんの？ なら頼むよー」

「えええ、これなの？ ペンネームにやまぶきベーカリーのオッサンつてあるんだけど？」

？

「一応、一般?」

「かなあ? ——ベンネーム、やまぶきベーカリーのオツサンです。ヒデくんのピンクというか赤というか、不思議な色のトサカはデビュー前からですよ? 渋社長と出会ったときからその髪だと聞いてます。いつグレたんですか? P.S. 新作のパンが焼き上がりました。いつでも来てねつ。だつてさ」

「オレさ。決めたんだよ。麻婆豆腐味のパンを食べさせられてからな。決めたんだよ。ぜつてえー行かねえからなつ」

「麻婆豆腐……」

「笑つてんじやねえよ。本場の四川味だぞ。辛すぎるわ。山吹のオツサンの新作は迷作だからな。リサが食べろ」

「イヤ☆ そういえば、出会ったときからトサカあるよね? こだわり?」

「こだわり」

「そつかー」

「反応薄いな、おい。いやね。下の名前、秀人でしょオレ。生前のアーティストにいたんだよね。憧れのギタリスト、h i d eがさ」

「それよくいってるよね。『オレは転生者だ』とか『元オツサンだ』とかさ」

「流すなよ。ホントだからね。……んで、生前とはいえ、憧れの人と同じ名前で似た顔立

ちなみにイケるやん。てな感じで染めたのよ。したら似てんのよ、マジで。テンション上がってさ。昼間の公園で歌つて踊つたわけよ。ひとりで

「ひとりで？ 楽器はアコギ？」

「ないよ。手ぶらだからな、そのとき。歌だけだわ。……お前、笑いすぎやろ。その後もヤバいぞ？ 皆々様がよ。さーつて居なくなんの。大人だけじやなくて子供もだぞ。ヤバいのがいる、みたいな？」

「待つて、おなかいたい」

「そんでもまあ、思い切り騒いで疲れてね。なにしてんねん、オレ。てな感じで最後に歌つたわけよ。『青空』を」

「……ああ、笑つた！ アタシ『青空』は好きだよ。いい曲だよねー。アンコール曲だけ集めて一枚作つてよ。いい歌たくさんあるんだからさ。『青空』は hideさんの曲なの？」

「違う。ブルーハーツ」

「違うんだ」

「笑うなし。そこで湊のオッサンと友希那と出会つたわけよ。これが初対面ね。てなわけで、染めた日と出会いは同じ日になるわな。グレたといわれたらその日じやない？」  
「そつかー。そこで湊社長を丸め込んで友希那の弟になるのかあ。関係者とか昔からの

ファンの間では有名だもんね。『オレの保護者になれ事件』ってさ

「いまいち納得いかん事件名だよなあ」

「じゃあさ。アタシとの出会いはその次の日?」

「翌日だな。いやね。当時のオレは中学生で、ネグレクトされてたわけでしょ。そんで、初対面の見知らぬオツサンが『今の歌はなんだねつ?』て、テンション爆上げで近寄るから殴るじやん。そしたら『お父さん!』てな感じで少女がパニくるわけよ。ヤバいだろ? 新手の援交かと思つたわ」

「ヒデがね。てかさ。よく考えたら湊社長もよく声かけたよね? ひとりで、歌つて踊つてたわけでしょ?」

「二ヤニやすんなし。オツサンは『青空』しか聞いてないわ。歌の途中から来てな。少女に睨まれながら落ち着いて話し合つたら改めて聞かせて欲しいっていわれてよ。勢いに負けて歌つてさ、歌い終わつたら何ていつたと思う?」

「んー。感動したつ!」

「金の匂いがする」

「待つて、ヤバい! おなか壊れるつ」

「そしたら少女がキレてな。その場で説教が始まつてよ。大変だつたぞ」

「金の匂いって、湊社長はホントマダラ……。おなかいたいわあ」

「その後はまあ、皆さん知つてるとと思うけど、近場の喫茶店でオレの事情？ 環境の話だわな。優秀と天才の双子の姉を可愛がり、オレは異物？ 居ない者として扱う両親、その財布から生活費を盗むオレ、みたいな」

「んー。ヒデが悲観してないからいえるけど、あれはないよ、ホントに」

「ないなあ。いやね。元オツサンだから気持ちは分かるよ？ 優秀と天才を可愛がりたい気持ちはね。でもさあ。メシは食わそうぜ。いまどき犬も嫌がる残飯だつたぞ。食つたけどな！」

「いや、笑えないから。……ホント、姉二人とは仲良かつたのが救いだよねー。こつそり、お小遣いを分けて貰つてたんだよね？」

「そうそう。お世話になりました。だから前の名字は公開しないのよ。腐つても二人の姉の両親だからね。嫌がらせはしても公開処刑はしたくないのよ？ 分かつてくれる？」

「まあまあ、手遅れでしょ。天才ちゃんがテレビで公開しちやつたし、優秀ちゃんも追認したからさ。あの両親は大変だろうねー」「だな。元弟の気遣いをなー」

「まあまあ、愛されてる証拠でしょ。それよりさ。アタシのお母さん。最近、キレイなんだよね。どゆこと？」

「それではR o s e l i aの先行デビューシングルを聞いてください。『B L A C K S H O U T』です、どうぞ」

# オレの保護者になれ事件。N O. 01

なんやかんやで神様とやら異世界転生させてくれるうえに得点をくれるとかいつたのだが、よく分からない。神様ならオレより先に死んだ親友を生き返らせて欲しいと頼んだら断られた。すでに輪廻転生したらしい。かつての親友よ、どんまい。

『他に希望は？　なんかないの？　聖人じやあるまいし欲望を吐き出せよ』

そんなら、今も生きてる親友たちに金運を。家族には健康運を。輪廻転生したヤツには音楽の才能とができます？

『おけ。やつとく。お前自身は？　生き返つても記憶あるからさ。お前自身なのは変わらないわけよ。だから欲望を吐き出せつてば』

いやあ、ヤツとバンド組みたかつたけど来世は他人だからなあ。どうすっぺ。あ。最近、物覚えが悪くなつてきてさ。良くしてもらえない？　あ。あとさ。手先が不器用ですね。なんとかしたい。なんとかなる？

『なるぞ。お前の欲望、ちつちえな。もつとないのか？　すげえ強くなつたりできるぞばつか、神様のばつか。不器用なめんな。すげえ苦労したんだぞ。社会人は会話と器用が重要だからね。給料上がんないよ？　結婚できないよ？

『お前な……。死ぬ三年前からいないだろ。彼女。どうする？ 女にモテモテになつち  
まうか？』

『ばつか、神様のばつか。修羅場は外からみるのが楽しいんであつて、体験するもん  
じやないぞ。』

『確かにな。同性からストーカーされるヤツとか初めてみたわ。嫌がらせ目当てだつた  
としてもよ』

『あれは不幸な出来事だつたね。女が別れたといつたとは言え、男は付き合つてゐるつも  
りだつたから浮気になつたんだよなあ。現実は世知辛いね。』

『お前なあ。あれは別れる、別れないってケンカ中だつたろ。食いつくなや』

『据え膳は喰うからね。仕方ないね。』

『もういいわ。お前の欲望を聞きたいのに説教してゐるじゃねえか。完全記憶能力と手先  
の器用さな。おまけで健康体と音楽の才能もくれてやる。来世はブラツク企業に入る  
なよ。……転生先はバンドリでいいか？ 来世はバンドやれ。お前の後悔で一番強い  
のはそれだからな。親友が死んだからつて無気力になりやがつて。お前自身の幸せつ  
てヤツを掴めよ？』

『……神様。ありがとよ。ばんどりは分からぬけどさ。オレ、音楽好きだからさ。来  
世はバンドやるよ。ありがとう、ございます。』

『おう。しつかりな。いつてこい』  
いつてきます！



そんなわけで転生したのだが、両親がクソだつたから義務教育が終わるまで我慢して家出してやつたわ。当面の生活費を財布から盗んでな。ざまあ。姉二人には伝えてあるから心配はしてないはず。両親？　するわけねーですよ。姉二人には落ち着いてから会うつもりだしな。

一応、名乗るか。水川秀人だ。

中学の卒業式をサボり、十五歳のクソガキが朝から美容室にいつて髪を派手に染めた。憧れのギタリストに似すぎてビビつたけど、テンションは急上昇。世間體を気にする両親がオレの居ない卒業式に出てると思うと笑えるだろ？　盗んだバイクはないが『十五の夜』を口ずさみながら歩き回り、ふと目に入つた公園に入つたわけよ。それで一発目に『リンダリンダ』を歌い、ヘンテコなダンスを繰り広げながら騒いだのさ。

あ、うん。通報はされなかつたな、うん。

まあいいじやん。バカ騒ぎも楽しいぞ。お嬢ちゃんもやつてみ。それでメニ『青空』

をノリノリで歌つてたら、あんたらが来たのさ。ネグレクトの詳細？ オレを養うつも  
りがなけりやいわんぞ。なにが楽しくて不幸自慢するのさ。これから独身女性の家に  
潜り込んで養つてもらうつもりだからね。あんま心配しなさんな。オレは大丈夫。

少女よ。その目はやめたまえ。いじめたくなる。

アア？ オツサンが養う？ —— そだな。一応訊こうか。オツサンは仕事なにして  
んのよ。オレと同じつてオツサン。……無職はヤバいだろうが。このお嬢ちゃん、娘さ  
んだろ？ 二つ上？ ははつ、どんまい。オツサンの年齢とかいらんわ。はいはい。三  
十七ね。……二十歳かやるな？

娘さんが睨んでるぞ。たくよお。おう、オツサン。おごるわ。こここの会計は任せろ  
よ。なあ、オツサン。前なにしてたの。音楽？ プロ契約を切られたあ。自分の納得い  
く音楽がやりたいなら事務所を立ち上げたらえんじやないの。オレの前世のプロは  
使い分けてたぞ。売る音楽、やる音楽をよ。まあいいか。飲もう。おう、おつちゃん。  
ビール二つ！



湊友希那は驚いていた。今では行き付けの喫茶店のひとつである『羽沢珈琲店』に父

親を連れてくる途中に出逢つた少年、氷川秀人の背景は灰色ではない。黒だ。双子の姉妹である優秀な姉の氷川紗夜から詳しく聞いている。友希那の印象はめちゃくちゃな弟だつたが、たつた今納得した。優秀と天才ときて変人である。

「おっちゃんが店長？ ビールは？ ないの？ しけてんなー。んじゃあ、ブランデーとかない？ デザートに使うヤツとかあるよね？ あと灰皿ちょうどだい」

「秀人くんはアレだねえ。本当にロツクンロールだ」

「私が店長だけど、君は未成年だろ？ 今日はお客様が少なくてね。話が聞こえてたよ。それ。咥えないでね？」

「ダメなん？」

「ダメだねえ。それとね。一応は伝えるけど、店内は禁煙です。はい。アイスコーヒー

二つね。友希那ちゃんはカフエオレでよかつたかな？」

「……ありがとうございます」

「はい。ごゆっくり」

ぶつぶつと何かを言つていた秀人に呆れながら友希那の父親が笑いかけている。ストローに口をつけた友希那は改めて秀人を注視した。赤のような色をした派手なトサカ頭、螢光色の黄色のレインコートを着た秀人は父親と楽しそうに会話を弾ませている。一言でいえば『気に入らない』友希那の眉間が寄つた。男二人は未成年がどうの、喫

煙者の差別がどうのと盛り上がっているが、友希那の関心はそこではないのだ。

——音楽。

秀人の口から垂れ流された歌に衝撃が走つたあの瞬間が友希那の頭から離れない。秀人は自然体でだらけたように歌い、合間合間の奇妙な動きの意味が友希那には分からなかつた。喫茶店までの道中の鼻歌も気になつてゐる。秀人の言葉を信じるなら生前の世界の音楽だ。今生と似た世界だとはいえ、秀人が語るアーティストを友希那だけじゃなく父親さえも知らなかつた。まるでそう。

——異世界ね。

声を出さずに舌を転がす。面白くなつてきたじやない。友希那は知らず、口角をあげていた。

「そんじや、オツサンがレーベル作つてさ。オレが所属してやんよ。一緒に前世の音楽を広めようぜ。いやあ、いい拾い物したなオツサン」

「ははっ、簡単にいつてくれるねえ」

「苦労は若いうちにやれつて。前世の母ちゃんがいつてたぞ。中年は四十歳からだ。まだまだ若いからイケるべ

「そうかな？ まだイケてる？」

「イケるイケる。ジジイになつてもタバコ吸つて酒瓶片手にロツクンロールだ。どうよ

？」

「いいなあ……。確かにね。それも口ツクンロールだよ」

「——待ちなさい」

友希那は意気投合しかけてる父親と秀人を睨み付け、身を乗り出さないように二度三度と深呼吸をした。

「お嬢ちやん。なんぞ?」

「私の音楽……。違うわ。父さんの音楽を知らないのに一緒にやる? 笑わせないで」

「友希那……。お父さんはね」

「黙つて。私は、私たちには音楽しかないの。あなたに分かるかしら」

「分からん」

「なら、簡単に言わないでくれる?」

「お前もな」

友希那の視線が強まるのを受けた秀人は心の底から楽しそうな笑みを浮かべた。

「なにが面白いの?」

「——アカペラで一曲聞いたらオレの世界の音楽が分かるか?」

「知らないわ」

「だろ。ならよう。勝負でもすつか? 審査員はオッサンで、オレの音楽とお嬢ちやん

審査員はオッサンで、オレの音楽とお嬢ちやん

の音楽を」

「望むところよ」

「友希那……。お父さんは事務所の社長をする話でね」

「るん♪ つてきた！ 来て来てお姉ちゃん。ヒデがいるよー」

「ちょっと日菜！ 待ちなさいって、ヒデ？ 早い再開で嬉しいわ」

友希那はゆっくりと息を吐いて目を瞑つた。音楽の勝負。友希那は父親の音楽を、自分たちのバンドの音楽を愛している。負けるわけにはいかない。相手が誰であつてもだ。それが紗夜の弟であろうとも。

——だから。

目を開いた友希那の前に冰川姉妹がいた。優秀で生真面目な姉はいい。友希那の音楽に対する姿勢と似た音楽感をもつ冰川紗夜はまだいいのだ。紗夜はこここの常連客でバンド仲間だ。笑顔とまではいかないが、話し合えば分かってもらえる。明るく元気で天才肌の妹もいた。気まぐれの気分屋で今日明日にも音楽を辞めてしまうような危うさがある冰川日菜までいるのだ。冰川姉妹が揃うのは不味い。先日の友希那は痛い目にあつたのだから。

——私は知つてしまつた。

そう。友希那はとある日に知つてしまつたのだ。姉の紗夜が隠れブラコンであり、妹

の日菜が隠さないブラコンであることを。あの日は辛かつた。秀人の話題だと二人は止まらないのだ。打ち明けて貰つた立場としては嬉しいのだが、練習をそつちのけで見学にきた日菜と話さないで欲しかつた。世間体を気にする両親の手前、表で口に出せないストレスもあつたのだろう。友希那は仲間を思いやり、その日は黙つて聞き役に徹したのだ。

——アレをまたやるのは嫌。

事情を聞いた日菜は全力で、紗夜は見え隠れする態度で秀人を応援するのだろう。そうすればどうだ。二歳下の男の子に大人気なく追い詰めたことにならないだろうか。友希那の頭をよぎつたのは、紗夜がバンド仲間に秀人の存在を打ち明けたときに幼馴染の今井リサが泣きながら助力すると言つていた場面だ。

——困つたわ。

「困つたわ。リサに怒られてしまう」

「だからね、友希那。お父さんは……。これは聞いてないのかなあ？」

「どうすれば……。紗夜日菜が彼の味方をするのは決まってるわよね。リサは分かつてくれるかしら。ううん。リサなら大丈夫」

「日菜ねえ。ナイスタイミング！ アコギ、ありがとー。それでは聞いてください。『雨あがりの夜空に』と、『パパの歌』と『ディ・ドリーム・ビリーバー』のメドレーです」

「るん♪」

「これは不味い状況なのかしら？」

まあいいわ。

秀人の歌は久し振りだし、

静かに聞き

ましよう」

# オレの保護者になれ事件。N O. 02

突然の演奏に聾麹を買うどころかアンコールを頂いた秀人は快諾し、四曲目の『空を見なよ』と五曲目になる『チエインギヤング』に続いて六曲目に『HURRY GO ROUND』を選び、気持ちを込めて歌つた。

ふと我にかえるように静かな店内を秀人が見渡せば、すすり泣く声があちこちから響いくる。秀人は驚いた。紗夜だけでなく日菜や友希那も鼻を鳴らしているのをみた秀人は空気を変えるように立ち上がる。秀人が歯をみせて笑うと額の汗を雑に拭つた手で乱暴にアイスコーヒーを掴む。アイスコーヒーを一気に呷りテーブルに叩きつけ、歩き始めながらアコースティックギターを盛大にかき鳴らして片手をあげた。

「ラストは『Hi—Ho』だっ！」

人の波を縫うように秀人が歩く。いつの間にか増えていた人たちの顔を一人ひとり確認するよう目を合わせ、観客の顔がみえる位置で止まれば歌と身体を揺らす。歌い始める前は年配のお客さんが多かつた店内、入口付近が若い集団だと気づいた秀人が若い観客の前で跳ねながら歌つた。

——美竹さんたちも。

秀人は知らないが『Afterglow』の仲良し五人組も聞き入っていたのか、擦つていた赤い目を忘れて笑顔を浮かべている。汗を飛ばして歌う秀人の愉快気な顔、動き回る身体が音を楽しんでいることをこれでもかと伝えてきた。途中で弦が一本切れたのだが、構わずに歌う秀人は本当に音楽が好きだとわかる。アコースティックギターひとつで歌いきった秀人は喫茶店にいたお客様かんきやくフアンを自分の観客に変えてしまい、一人ひとりにお礼をいう秀人にまた歌う機会を作つて欲しいと日々に頼まれていた。

「そいつばかりは店長のおつちゃんに頼むわ。ライブだけじゃなくて、ギャラもお願ひやす！」

「君ね。確信犯だろ？ これで断つたらうちの常連客がいなくなるよ。ギャラは食事代、アイスコーヒーにランチをつけようかな」

「未成年でしょ。ランチタイムが終わつた時間に呼ぶから許して」

「はあ。商売人だなあ。聞きました皆さん。ランチタイムは混むから、お客様の居ない時間だつてさ。あれ？ オレのギャラ、ランチの売れ残りじやね？」

「気づいたか。私は商売人でね」

「汚いなさすが商売人きたない。ランチタイムにゲリラライブすつぞ」「やめて本当にやめて」

泣いて笑った観客が二人の漫才に拍手を送り、店長の娘である羽沢つぐみが驚きのあまりに固まっている。

「……友希那。秀人くんは凄いな」

「お父さん……。そうね。凄い音楽だわ」

友希那は秀人の音楽に魂を揺さぶられたように泣いてしまった。敗けを認めるしかないと薄い笑みを浮かべた友希那は、歌の感想に照れながらも二回目は近いうちにやると約束している秀人のくるくると変わる表情をみてか細い声で笑ってしまう。

——こうしてみれば年下の男の子なのにね。

「湊さん。どう？ うちの秀人は？ 凄いでしょ」

「おねーちゃんのいう通り！ ホントにヒデの歌は楽しそうねー。ね？ 友希那ちゃん

ん

「そうね。今日は負けたけど次は勝つわ」

氷川姉妹は首を傾げた。

「ええー。アコギの弦一本切れたのにもう一曲歌うの？ 聞いたかよ、おつちやん。その水ちようだい。あとさ。ギャラは今日から頼むわ」

「水ね。どうぞ。ギャラは売れ残りでよければね？」

「まいどっ。……にしても若いねえ、君ら。え？ おつちやんの娘？ 儲かつてまつか

?

「え？」

「ぼちぼちね。では娘と友人たちのお願いだ。最後の最後を頼むよ」「え？ お父さん？」

「あいよ。聞いてください。若いナンバーの『子ギヤル』と、アンコールのアンコールのラストは『TELL ME』」



「秀人くん。お疲れ様」

「ういーす。楽しかったわ」

ハイタツチを交わす父親と秀人に友希那は微笑む。座ろうとする二人に近寄る仲良し五人組の中で一番テンションを上げていた上原ひまりが両手をあげながら叫んだ。「よかつたよおおお。ホントよかつたよおおお」

「なにこいつ。病氣？」

「ヒデ、やめなさい」

「ひまりちゃーん」

「日菜先輩いいい」

——なぜ抱き付いてるのかしら。

「紗夜ねえも知つてるひと?」

「上原ひまりさんね。この五人組は幼馴染で結成したAfterglowという王道のガールズバンドよ。同じライブにも立つたわ」

「R o s e l i aと? なるほどねえ。……つか紗夜ねえのヒデ呼びも懐かしいな」

「んんつ。秀人。早い再開ね」

「どこからやり直してんのよ。我が姉ながらポンコツすぎる」

「流しなさい。ところで秀人。日菜から独身女性の家に転がり込むと聞いて探したのだけれど。いろいろとダメじやないかしら。あなたは未成年なのよ」

「大丈夫だいじょーぶ。紗夜ねえの知り合いつていつてたから連絡はとれるよ。まりなは仕事もあるし成人してる女だ。常識もあるよ? たまに壊れるけど」

「待ちなさい。まりな?」

「おう。月島まりな。知つてる?」

——紗夜。その表情は危ないわ。

「ちよつと『C i R C L E』に行つてくるから、秀人はここから動かないで。いい?」「ライブハウスの? 今日のシフトは休みだつたはず」

「秀人。話し合いましょう。立ちなさい。そして床に座りなさい。話があるわ」

荒ぶる紗夜を止めたのは友希那の父親だつた。

「はいはい。すまないが、話ををしていいかい？ 秀人くんの保護者になる件なんだけどね。彼女たちにも証人になつて貰おうかな」

「いいぜ？」オレはちつと休みたいからオツサンから頼むわ。一応、名乗ろうか。氷川

姉妹の弟、優秀と天才に続く変態、氷川秀人ね

「そうね。あなたは変人だわ」

「湊さん？」

「友希那ちゃん？」

「やめなさい。説明は任せられたよ」

秀人の環境は愉快ではない。専業主婦の母親からの監視ともいえる拘束を受け、父親からは仕事の手伝いを強要されていた。それもこれも、秀人が幼少の頃に暴露した『前世の記憶がある』ことが根本にある。母親は自身の子が殺されたと嘆き、父親は悪魔の子と言われないか世間体を気にした。それがエスカレートしたのは秀人の理解だ。

——元オツサンだもの。仕方ないよね。

醜い感情を理解された両親は荒れた。腫れ物を扱う態度から異物への虐待にシフトする。秀人の環境に納得のいかない姉妹を宥めた秀人は両親の感情を受け入れている

からこそ、秀人自身は両親を恨んではいない。それでも付き合うのは義務教育までと決めていた。歩み寄り、和解するよりも距離をとつて時間をかけることを選んだのだ。

仲良し五人組にはキツい話題だろう。困惑と同情に満ちた視線を秀人に向ければ、秀人に迫る紗夜と友希那に迫る日菜がいた。姉妹と弟の良好な関係に五人は息を吐いた。「そして友希那の父親である私が保護者の候補にあがつたわけだ。秀人くんはまだ未成年だからね。……そうそう。秀人くん。保護者を引き受けるには条件がある」

「あいよ。聞こうか」

「私がこれから作る事務所に所属すること」

「おう」

「秀人くんの記憶にある全ての音楽を世に広めるためにはメジャード、商業的な音楽も必要になる」

「だな」

「もちろん。売り上げに関わらず好きな音楽や秀人くんのオリジナルも頼むけどね」

「そつちは別名義にすればいい」

「そうだね。本当にそうだ。僕たちもそうできれば良かつたけど……。秀人。僕は一度、音楽から距離をとつた。僕の手は信念を曲げた音楽を奏でて汚れているかもしけない」

「それもまた音楽だぜ」

「秀人は音楽を愛しているかい？」

「いい言葉があるぜ」

— NO MUSIC, NO LIFE —

「オッサン。オレの保護者になれ」  
「秀人。ロツクスターになれ」



この日、羽沢珈琲店で秀人と居合わせたひとたちは、秀人が長らく公で語らなかつた出生を知る初期のファンとなり、いつまでも秀人を支え続けていた。秀人のライブがステージによつて雰囲気を変えるのは、これが原点だと後のインタビューで語つているのは有名だろう。秀人がその場の客層による選曲を、その場の空気を掴む歌に年齢を問わず酔いしれ、ヒデちゃんの愛称で親しまれ始めた原点もある。ひとりのファンとしては原点のゲリラライブに立ち会えなかつた悔しさが今もある。それでも、おじいちゃんやおばあちゃんからも愛されるロツクスターの原点のゲリラライブ、その前から知つてゐる私は自慢をしたい。私があなたの最初のファンであると。

また、原点のゲリラライブにいた初期のファンだけでなく、秀人のファンは秀人が何歳になろうが健康でいて欲しいと願う。いつまでも辞めない秀人に、喫煙と飲酒を辞めさせようとファンが結託しているのだ。秀人はファンとの闘いだと笑つて語った。ファンがあらゆる禁煙グッズを事務所に贈ればライブ中に喫煙し、いろんなノンアルコールをライブの控え室に差し入れるのを秀人以外の全員がいただくお約束となつた。そんな秀人がファンに笑いかけるように、四月一日の正午に毎年公開する人間ドックの情報にファンは一喜一憂している。今年も健康だと。

いくつか余談を挟んだが、『オレの保護者になれ事件』を語り終えよう。これからもひとりのファンとして、ひとりのアーティスト、『H i d e』を追い続けたい。  
——語り手、月島まりな。

## Music Star Channel 02

「いやあ。『BLACK SHOUT』はいい曲でしたね。ファーストアルバム出るのいつだっけ？」

「再来月。みんなスタジオにこもつてるよ。それよりもさ。お母さんとデートしたつて目撃情報があつてね。ジュエリーショップに居たつて」

「ジュエリーショップ？……それ違う。リサだわ。その情報は友希那だろ？お母さんが問い合わせられたつて嬉しそうにいつてたわ。リサと友希那の誕生日プレゼント買いいにいつた日ね。お前ら後ろ姿が似てるからなー」

「あの日？見られてたんだ」

「勘違いを正すのもさ。リサがサプライズするつて聞いてたから悪いと思つたんだと。オレを荷物持ちとして誘つたといつたらしいぜ」

「ねねつ。ヒテ？それは助かっただけど、アタシが知らない情報をお母さんとやり取りしてるんだよね？それとさ、聞いた日と違うんだけどなー。どゆこと？」

「ああ。オツサンがダメつて、ほら」「なに？話題変えんの？」

「荒ぶつてんなー。んじや、あれだ。初のワンマンでチケット完売したらしいじゃん。おめでとー」

「ありがとつ☆ メジャーデビューしてから初のワンマンライブだからね。みんなの気合いが凄いんだあ。アタシも練習しないと」

「チケット貰いました。ありがとうございます」

「どうも☆」

「デビュー前の頃なら自腹出して買うんだけどね。今回は関係者席になつたわ。ダイブしたかつたのに」

「ダイブはホントにやめて。後ろのほうからヒデが流れてきてさ。ステージに上がっちゃつたことあつたじやん? 友希那、めちゃくちゃ驚いて歌うの止めたもんね」

「あつたな。あのときはオレが歌つたけど、アンコール貰つてビビつたからな」「他人のライブで事件起こすのやめてもらえますう?」

「ファンだから仕方ないね」

「しばらく出禁になつたくせに」

「うるさいよ。にしても、またベース上手くなつてるじやん。オレのライブ出る?」「出ない。アタシは観客でいいです。あんなライブに出演したら羞恥心で死んじやう

よ」

「あんなライブ」

「笑つてんじやないわよ。うちはガチでやる正統派なの。ヒデはおかしいって。この前の単独ライブさ。水鉄砲片手に走り回るボーカルと逃げ回るギターとか初めてみたからね。あのときばかりはお客様んでよかつたと思つたドームライブでした。まる」「楽しかつたろ?」

「めちゃくちゃ楽しかつた」

「一緒にやる?」

「やらない。リードギターのまりなさんのさ。透けてたからね。あの後のアレはさすがに叫んだけど。だからね、アタシは観客がいいです」

「あれは笑つたな。演奏止めないあたりも笑つた」

「めちゃくちゃ笑つた。演奏止めないあたりはさすがまりなさんだつたよね」

「面白かつたよなあ。次の曲いく前に脱いだ服を観客に投げ捨ててさ。……そうそう。上半身ブラだけの状態で最後まで演奏してたじyan。笑えるぞ。帰りの服がなかつたのよ」

「まりなさん」

「爆笑してんな。まあ、スタッフがコンビニに走つて何とかしたんだけどね。まりなはあれからさ。ライブには水着で出る宣言してたぞ。用意するのは水着じゃなくて着替

えだろうに』

「あんま笑わせないで」

「死にそうになつてやんの。まりな伝説にまた一ページ」

「んんっ。ライブで思い出したけど、いつも拡声器を用意してるので？ 使わないときあるよね？」

『唐突』

「笑つてんじやないわよ。ほら、まりなさんの話題はネットの海に乗せないほうがいいのよ」

「手遅れだけどな。すでにファンとかスタッフが拡散してるだろ。本当にまりなは愛されてるよなー。今まりな伝説いくつあんの？ ……また笑つてるし。なに？ 拡声器の話？ スタッフから話題変更の指示です。拡声器は停電の準備ね。マイクが死んでも歌えるから」

『あつたね。停電中のライブ』

『生き返つたな』

『生き返つたよ』

『停電中のライブねえ。あれからは常に用意してゐるわなあ』

『あれも事件名ついてなかつた？』

「脱ぎまりな事件?」

「違うから」

「アレね。『オレの歌を闻け事件』ね。え? まりなの事件はないよ。伝説はあるけど」「伝説」

「また死んだな。まりなは定期的にやらかしてるからなあ。……意外? まりなは無自覚にやらかすよ? ああ。リスナーは分からぬいだろうけど、生配信のスタッフとライブのスタッフは違います。だからライブ現場のまりなを知らないわけね。お前もライヴ来いよ。知ってるか? まりながライブでスカートを履かないのは、リハーサルでジャンプしたときにひっくり返って下着を晒したからさ」

「スタッフまで笑わせにいくのやめて」

「生き返ったわよ?」

「生き返ったわよ?」

「みなさんこんにちはー☆ まん丸お山に彩を! 丸山彩でーすつ!」

「彩ちゃん?」

「なんでいんのよ?」

「はえ? 出番じや?」

「るん♪ ヒデちゃんのおねーちゃんの冰川日菜でーすつ☆」

「現役女優の白鷺千聖です。ヒデさん。これ、おみやです」

「どもども」

「はえつと、五人揃ってないけどもつ。Pastel\*Pallettesでーすっ！  
—おニユーの彩ポーズはどうですか？　いい感じですか？」

「彩ちゃん」

「リサちゃんのツボに入つたー」

「だから、なんでいんのよ？」

「たしか秘密へーき？」

「彩ちゃん出てんじやん」

「MCのお二人に対してシークレット、サプライズゲストですね」

「ヒデちゃんのとなり座るー」

「別にいいけど。とりあえず丸山。ハンバーガー買つてきてくれない？」

「仕事中だからダメです！」

「仕事中じやなかつたら？」

「お持ち帰りですか？」

「店内で」

「ここで食べるんかいっ！　どうですか？　いい感じですか？」

「その流れなに？ 彩ちゃんも付き合わなくていいからね。千聖。おみやありがとねー」

「この番組に出演が決まったときお礼の電話をいれまして、ヒデくんとツツコミの練習したんですよ。どうですか？ いい感じですか？」

「なにしてんのよ」

「そんな彩ちゃんもかわいー」

「彩ポーズよりはいい感じです」

「白鷺の評価がガチすぎて笑える」

「ちよちつと、お待ちくりやしえ。……もしかしておニューの彩ポーズ、不評？」

「コンセプトはヒデさんの自宅？ ですかね。私はヒデさんの向かい側に座りますね。リサちゃん。隣失礼しますよ」

「はいはい。いらっしゃい」

「あろ？ 私の席は？」

「お誕生日席な。ひとり用のソファにどうぞ」

「あはい。座りますね」

「三人とも何か飲む？ あるのはアイスティーにアイスコーヒー、ウーロン茶と麦茶だよね？」

「こおり水もあるぞ。丸山」

「水ですか？ 私はアイスティーガ」

「なんでやねん！ 丸山なにしてんのよー。ここはツツコミが欲しかったなあ」

「はつ」

「なんでメモしてんのよ。二人は？」

「あたしはウーロン茶かなあ。千聖ちゃんは？」

「そうですね。アイスティーでお願いします」

「はいはい。入れてくるから待つててね」

「にしても白鷺。事務所通せよ」

「現在交渉中ですよ？」

「生配信使つて有利にしようとすんなや。面白いからいいけどさ」

「氷水つてなんでやねん！」

「丸山あ」

「ななんですかつ？」

「その話題終わつただろ？ リサいないだろ？ 氷のない水を出すぞ？」

「はえつと、ですね。……あ居た。リサちゃん。氷水じやなくてアイスティーで！」

「またリサちーがツボつてるねー」

「そういえば私たち。そちらの事務所に移籍するのが本決まりになりました。その節はお世話になりました。これからは事務所の先輩後輩として、お世話になります」

「なあ白鷺。それ大丈夫?」

「湊社長からゴーサインが出てますよ?」

「出てるなー。ドラマは?」

「諸々の細かい話は後程。とりあえず、万事順調に進んでますのでご心配なく」

「そりや、おめでとう」

「なので曲をプレゼントしていただければ……」

「あー。『歩く花』に似たやつねー。ドラマの空気が分からんから何ともいえんけど、『ONE LIFE』とかならBGMで……。なにさ?」

「はえっと、難しい話ですから黙つてようかなーと。……アイスティー、まだかな」「他人事か。まあいいか。丸山だし。日菜ねえは後で会議に参加してね」

「なんで?」

「冰川姉妹の弟だと暴露したのは誰かなー」

「あたしつ!」

「いっぱい怒つてあげよう

「ひーん。助けて彩ちゃん」

「これっ！ 並んでも買えないケーキだよね？ 食べたかつたんだー。さすが千聖ちゃん！ リサちゃん。先食べていいーい？」

「いいよー。そつちにフォークないと思うけどねー」

「リサちゃんフォークう！」

「今用意してるー」

「自由だなー。あ。曲流すの？ え？ マジでオレが選んでいいの？ 『ONE LIFE』と『ハイブリットレインボウ』を流せる？」

「裏でみてたけど、スタジオ内で流すんだねー。別々に流すのが普通なのに、ヒデちゃんなんで？」

「オレが聞きたいからー。大丈夫？ それでは『ONE LIFE』と『ハイブリットレインボウ』の二曲続けて聞いてください。白鷺は感想をくれ」「分かりました。流してください」

「どーぞ☆」

「……フォークまだ？」

## オレの歌を聞け事件。

その日の秀人は他人様のライブをジャックして出禁から解禁になつて初めてのライブである。『第一回ライブジャック事件』の舞台であるR o s e l i aのライブでやられた秀人に一番怒っていたのは友希那だ。友希那の怒りは凄まじく、無言で泣きながら睨み続ける友希那に秀人は手を焼いた。秀人が許されたのは友希那が納得するまで幾つかの楽曲を提供したからである。

——後に秀人（プロデュース名義が秀人）はR o s e l i aに似合う楽曲が決定するまで、かなりの数が却下されて嘆いたそうだ。特に提案した楽曲の中にあつたとされる『ペチャパイ』と『小フーガハゲ短調』はH i d e（アーティスト名義がH i d e）のライブで異様に盛り上がる曲として知られているが、湊友希那にこそ歌つて欲しかつたと今でも述懐しているらしい。湊友希那は怒髪衝天だつたそうだ。当たり前だ。

それでも今は月島まりなの持ち歌だと言い張るH i d eのファンが多く、月島まりな本人は罰ゲームで歌つてるだけでCはあると豪語している。快く取材に応じてくれた彼女のこうした自爆が——他にも幾つかあるがここでは語らない——ファンに愛されるゆえんだと納得し、この二人の関係性が『事件と伝説』を築き上げ続けている理由か

もしれない。

音楽雑誌『月刊ライブハウス』の『事件と伝説』より抜粋――

この日のライブはR o s e l i aが主催し、最初の演奏を一組目のP o p p i n, P a r t y、二組目をA f t e r g l o w、三組目が主催のR o s e l i a、サプライズゲストとしてH i d e with H T T. S a w aを予定していた。

事故が起きたのは三組目の主催であるR o s e l i aの二度目のアンコールを演奏していたときだ。中規模のライブハウスとしては大失態となる、停電。そのときの秀人は控え室で待機しておらず、拡声器を片手に舞台袖で乱入の準備をしていた。もちろん許可はとっていない。突然の暗闇に面を食らった秀人が舞台に足を進めたころ、一体感のあつた音楽と歓声がバラバラになつていてステージがあつた。

――秀人は無言で歩いた。

本来の演出としては三度目のアンコールを邪魔するよう登場した秀人が『丸の内サディスティック』を拡声器で歌い、バックバンドが歌の途中から順次参加していく予定だつた。

『オラアアア！ オレの歌を聞けえええ！』

困惑する観客の声を遮つた秀人の音が拡声器を通してライブハウス内に響いた。秀人は拡声器を使って『上を向いて歩こう』を歌いながら身体を大げさに揺らしている。

観客からは戸惑いの声が消えて笑い声と歓声が上がった。歌い終えた秀人がステージの中央まで歩いて友希那と肩を組んで笑顔になる。

『おう？ パニパニツクですな。スマホ持つてるヤツら。こつちに向けてライト付けろ。こんな感じね』

秀人の名前が観客から呼ばれている中で、秀人がポケットからスマホを取り出してアブリにある懐中電灯を点火した。その意図に気付いた観客が次々と光を点けてステージへ届ける。呆然としていた友希那が我を取り戻すと秀人に鼻で笑われたのでうつすらと頬を染めながら秀人を睨んだ。

「……秀人？」

『マイクも死んでるのか。おい、スタッフ。もういつちょ、スタッフ。給料分は働けよう。……友希那。一緒に喋ろ？ ほら拡声器』

『リハーサルより来るのが早いわ。『また何かするつもりだつたわね』』

『うん。もうちょっとしたらね？ 亂入してH i d e ビーすとやろうとしたのよ。みんな。やつていい？』

——いいぞおおお。やめてえええ。ダメえええ。友希那あああ。やつてよおおお。ヒデちゃーん！ まりなあああ！ 友希那あああ！ 友希那がんばれえええ！ ゆ！き！ な！ ゆ！ き！ な！ ゆつ！ きつ！ なつ！ ゆつ！ きつ！ なつ

！ 頑張れえええええ——

『私が応援されてるわね』

『誰だ、まりな叫んだヤツ。あれやな。友希那を応援してるヤツらはオレがジャックしたとき居たんだな。あれは可愛いかつたな。な？ お前ら？』

——居たあああ。見たあああ。友希那可愛いいいい。笑ったあああ。みてな  
いいいい。負けないで友希那あああ。可愛いいいい。離れるおおお。まりな  
さあああああん——

『秀人は私の敵ね』

『ガチトーンでいわない。顔が赤いぞ？ それとまりなは機材と闘つてるからね。ス  
テージには上がらないよ。まりなのファンが一番気合い入つてるのが笑える』

『私。さつきの歌。知らないんだけど。また。隠してたわね？』

『おおう。片言。リサ、リサちー。お前の嫁どーにかしてー』  
「無理いいい」

『叫ぶなや。……面白いわあ』

『曲名は？』

『そのまんま。『上を向いて歩こう』』

『そのままね？』

『だよ？ お？ ギター生き返った？ きやー紗夜さまあー』

——水川紗夜の目が笑つていらない微笑でギターソロを披露する。

『ベースは？ リサちー』

——笑顔の今井リサがベースのリズムを刻む。  
『いいねえ。あこ、オレらよくない？』

——秀人とR o s e l i aの名前を叫びながら宇田川あこがドラムを叩いた。  
『そんじやあ、キーボード！ つかさ、燐子。レベル上げしんどい。手伝つて』  
——白金燐子が笑いながら領いてキーボードを鳴らした。

『どうよ、友希那。オレのバンドは？』

『ぶん殴るわよ？ え？ マイクも大丈夫？』

『なら歌うか。H i d e で『B L A C K S H O U T』』

「ままつ待ちなさい待ちなさい！」

『マイク生き返ったの？ いやあ、残念だわ。聞いて欲しかつたのに』

「私の、私たちのR o s e l i aよ。秀人にはあげないわ」

『他の曲はまだ練習中で歌えないんだよね。いや、お恥ずかしい』

「聞いてないわよ。そっこつ。歓声をあげない』

『怒られてやんの』

「笑つてんじやないわよ。秀人の出番はまだよ。今は私たち R o s e l i a の時間なの」

『なら仕方ない。リサ。帰ろうぜ』

「リサはあげないわ』

——リサねええええええええええ——

『今日一番の歓声じやないか？　へい、リサちー。愛されてるう』

「いええええい』

「そんなんじやないわよ。リサもノらないで。……それじやあ私の歌を聞いて。『B L

A C K S H O U T』

『おい』

「なによ？」

『友希那、お前なあ。アンコールの予定曲と違うだろうが』

「別に。私が歌いたくなつたのよ。悪い？」

『……二人で歌うか。今度は出禁にしないでくれよ』

「仕方ないわね。R o s e l i a でいくわよ』

『H i d e がいくぞ？』

——アアアアアアアアアア——

「私の歌を聞いて  
『オレの歌を聞け』

—BLACK SHOUT—

最高潮に達した歓声が上がる。友希那の力強い歌声に秀人のシャウトが入り、秀人の艶やかな歌声に友希那のコーラスがプラスアルファされた『BLACK SHOUT』は観客の盛大な歓喜を呼んだ。歌い終えた二人がハイタッチを交わし、Roseliaが舞台袖に消えていき新たなバンドが出てくる。

『ここからはオレのライブだ。今日のバックバンドはHTT.Sawa』

それぞれが楽器を鳴らして応え、秀人の笑みが深くなる。秀人は正式にバンドを組んでおらず、その時々に呼びたいバンドを観客の前に立たせた。放課後ティータイムの四人に山中さわ子を足したバックバンドは緊張の色が出ている。

『このままいつたら失敗しそうだなあ。そだそだ。実はね。裏でスタッフに混じつて色々やつてたまりながいまーす。な、の、で。まりながステージに来ちやうような曲、アカペラで一曲歌っちゃおうかなあ』

——うおおおおお——

『野太い歓声が笑える。月島まりなにプレゼント。なんならまりなの持ち歌にしてもいいよ? 聞いてください。未発表曲の『ペチャバイ』』

観客の怒号と悲鳴の中で、それはもう楽しそうに秀人は歌いきつた。H T T . S a w a と一緒に歌うかと秀人が訊いたときに彼女たちは全力で首を横に振った。

『まりなな。お前がスタッフまとめてんだからさ。このあとも停電したら『ペチャパイ』を歌い続けるからよろしく』

女性の叫び声がした。

『なんかね。予定が狂いまくつてますわ。とりあえず曲順をいいまーす。一番は『丸の内サディスティック』で、二番が『L E M O N e d I S C R E A M — C H C O — C H I P v e r s i o n』な。二曲続けてオレが歌うわ。三番四番は彼女たちが歌う『カレーのちライス』と『D E A T H D E V I L』ね。カレーは飲み物つて聞いたけどホント？　あ、違う。そうよねー。五番六番はオレね。『D . O . D ( D R I N K O R D I E )』と

『B E A U T Y & ST U P I D』だ。合間合間に停電になつて『ペチャパイ』を歌い出したら、みんなでまりなを呼ぶんだぞ？　一回いこうか。ペチャパイ？』

——まりなさあああん——

『さんづけに悪意を感じる。どうしたさわちゃん。腹が捩れてんの？　友人の不幸を笑っちゃダメだと思うよー。澪なんて真っ赤じやん。ベースの彼女ね。ベースの彼女、澪、可愛くない？　君は大丈夫だな。ペチャパイとは呼ばれないよ。逆だからね』

——きやあああ。セクハラあああ。ダメえええ。可愛いいいい——

『すげえ。このバンド、ペチャパイがいねえんじやねえ？ あそだ。さわちゃん。ハゲの歌もあるよ？ 聞いてみる？』

「やめてホント、ギター弾けない」

『うえーい。スタッフとまりな、バンドのみんなも大丈夫？ 一曲目いつちやうよ？ あそだ。アンコールは一曲しか用意してないから速やかに解散してね？』

——いやあああああ——

『黄色の悲鳴ありがとう。ホントにいくよ？みんな準備できた？ さわちゃん大丈夫？』

「ホントごめん。大丈夫っ！」

『いえい。H i d e w i t h H T T . S a w a 『丸の内サディスティック』



そのあとにも何度も停電したライブは最早停電中のライブと言つても過言ではなく、観客が停電を喜び、大満足で帰つたという伝説のライブになつた。今もなお語り継がれているのは、月島まりなの怒りのステージ乱入だろう。不安定な機材と走り回るスタッ

フを嘲笑うような秀人と観客のコール&レスポンスに月島まりなの限界は越えていたのだ。アコースティックギターを振り上げた彼女は悪くない。それでも月島まりなは違う。やはり、まりなさんだつたのだ。ギターを振り下ろす手がすっぽ抜けてドラムを破壊した。静まり返り、呆然とした周囲に意を返さず秀人は言つた。

「これから持ち歌な。歌え」

——語り手、今井リサ。

## Music Star Channel 03

「素晴らしい曲、ありがとうございます。……でも、少し違うんですよね。他にあります？」

「白鷺い。……他にねえ？『JAM』とか『樂園』はどうだ？ 女の声なら『小さな頃から』が思い付いたけど、美竹が気に入つて歌つてるからなあ。あとで連絡してみるわ。他には『SWEET DAYS』とか『ダンデライオン』もいけるか？ どれか用意できる？ あれ？ 構想作家は？」

——お手洗いに。少し時間をください。

「美味しかつたー。ねねっ、あずにやん。声入つてるよ？ そこは紙に書いて見せてさ、伝えようね？ アタシ、あずにやんは何かやらかすと思ってたんだよねー」

——紙に？ あれ？ これか。

「あずにやんはなあ。どことなくポンコツの匂いがするわ。そろそろライブ出る？」

——いやあ、まだ勉強します。

「はいな。どした白鷺？」

「ええ。澪さんの後輩でしたよね？」

「だよ。業界の勉強中でオレの付き人の真似事をしてさ、関係者に顔を覚えて貰つてんの」

「いい心掛けだと思います。ですが、澪さんの勉強はいいんですか？ 単独ライブにも出てましたけど関係者席では騒然としてましたよ？ 誰だアレ、謎の高スペック？ みたいな感じでしたね」

「澪は崖から押したら飛ぶ」

「ええ？ リサちゃん？」

「確かにそなうなんだよ。澪ちゃんはできる子」

——ですね。あ、放送作家さんが戻りました。

「だからね、あずにやん。声が入つてるの」

「これがキヤラ立ちつ」

「座つてろ丸山。クリームついてんぞ」

「はつ。……どうですか？ いい感じですか？」

「丸山あ」

「ヒデのツボに入るのも珍しいねー。彩ちゃんはどこを目指してるの？ はい、ティツ

シユ」

「ありがとー。リサちゃん。いやリサチー！ 聞いてくださいよー」

「彩ちゃんに初めていわれたー。顔を拭かなくていいの？　口元ヤバいことなつてるよ？」

「なんか最近ですね。最近？　多分最近ですね。アイドルらしいことしてなくて。なんかファンにもいわれたんです。『迷走してんなー』って」

「そのまま喋るんだ。……うーん。方向性があ。難しい話だよね。でもさ。それは皆さんの前でいわなくともいいんじゃない？」ここ生番組。彩ちゃんの悩みがネットの波に乗っちゃうからね。そろそろティッシュを使おつかー」

「はっ」

「あたし、そーゆーの、彩ちゃんらしくて可愛いと思うよー」

「だからね。クリーム、取ろ？」

「これはエゴサーチが捲る？」

「丸山あ」

「ヒデちゃんが死んだー。おねーちゃんが背中を擦つてあげよー」

「それにね。ヒデが彩ちゃんたちを名字で呼ぶのも気を使つてるからだよ。自由にやつてるようみえるけど、生配信だから記録に残るからね。だから顔を拭こつか」  
「そうですね。いつもなら呼び捨てです」

「ヒデくん……。ちょっとトキメイたので、アイドルのプロデュースをお願いします！」

もう無能事務所じやありませんよー。頑張りますよー」

「彩ちゃん寄らないで。ヒデちゃんが汚れる」

「ちよつとー。汚れるつてなんですかつ。汚れるつて！ アイドルですよつ！」

「丸山。クリームが付くからね。顔をキレイにしてこい。アイドルなんだろ？」

「はいっ！ 行ってきますっ！」

「……行つちゃいましたね」

「行つちゃつたねー」

「パスパレ的にはどうなの？ イメージ変えんのは」

「ヒデが生き返つた？」

「オレは生き返つたよ」

「そうですね。事務所の色が変わりますから、新しいパスパレを届けるのもアリだと思います。クリームはないですが」

「あたしもー。アリだと思うよ？ 彩ちゃんは凄いよねつ。あたしなら恥ずかしいなー」

「歌唱力は上がつた？」

「そこはまあ。鋭意努力中としか」

「この前のライブでね。歌詞を間違えてたよー。なんかファンのひとたちは口パクじや

ないから頑張れーってなつてた』

「丸山はホント面白いな。ちょっと考えてみるわ。思い付いた曲があるし」

「あるの?」

「パツと出てきたのは『カレーのうた』だな』

「ダメでしょ」

「リサちー? どんな歌か知らないけどね。笑いたいの堪えて変顔になつてるよ?」

「もう無理」

「リサちゃん……。反応からすれば、まりなさん系ですか? ライブでは歌つてませんよね?」

「歌つてない。保坂つているだろ?」

「気持ち悪いひと?」

「日菜ねえもそうなんだ。アイツの持ち歌。おいおい白鷺。女優の顔じやないぞ」

「すいませんでした。気持ち悪いひとなので」

「作曲家としては優秀だからね。本人はアレだが」

「キモいとかじやなくて気持ち悪い」

「日菜ねえ。ガチトーンでいわない。さすがに用意するなら違う曲だから」

「だよねー」

「ライブで聞いたことがあります?」

「ないんじゃないかな。オレのイメージに合わないから歌つてない、はず」

「ヒデちゃん? たまに変な歌、あるよね?」

「日菜ちゃん? なんで怒ってるんですか?」

「多分。『バラライカ』だと思う」

「あのとき『やらないか』だつたよね?」

「ああ。ライブで太い悲鳴が上がつたっていう。マスコミでは問題視されてましたけど、本職のひとたちは大喜びだつたという事件の?」

「本職つ」

「リサちー……。あれはね。まりなさんが『バラライカ』を歌い終わつた直後に頭から演奏が始まつてさ。戸惑うまりなさんにヒデちゃんが『やらないか』つて、歌い出したの。おねーちゃん。ヒデちゃんがホモに走るのだけは許さないよ?」

「走らないから。アレ以来歌つてないからね。……そうそう。丸山に歌わせようと思つたのは『ロマンティックあげるよ』と『でてこいとびきりZENKA!パワー!』ね。オレのイメージよりも可愛らしい感じの曲だからね」

「可愛らしい感じ、ですか……」

「なにさ白鷺。その不服そうな顔は」

「いや別に。何も思い出してませんよ?」

「含み笑いすごいですね」

「うんうん。二人がこんなに仲良くなるとは思わなかつたなー。最初は悪かつたからなー」

「あそれ、アタシ知らないけど

「リサが生き返つた?」

「アタシ生き返つたよ」

「別にいいじゃないですか。私の昔話は。それよりも可愛らしい感じが気になります。  
どちらか流せませんか?」

「またまたー。ヒデちゃんに『お前を蝋人形にしてやろか』つていわれたこと気にしてた  
くせにー」

「ん? 『蝋人形の館』だつたつけ?」

「それそれ

「リサちゃんつ」

「なんでそんなこといわれたの?」

「んとね。女優らしい硬い笑顔だからつて

「日菜ちゃんもつ! 二人ともいいじゃないですか私の話は充分、もう充分ですか。」

ねつ?」

「笑われてるぞ?」

「ニヤニヤしないつ! あれはちょっと演技に迷いが出てて、それをヒデさんがつて違う!」

「戻ったか」

「戻りました!」

「ニッコニコだな。なんかあつた?」

「湊社長からゴーサイン貰いましたっ! 移籍したばかりだからプロデューサーが決まってないみたいで、ここは是非ともヒデくんにお願いしたいと思いますっ!」

「なにしてくれてんの? 意外と忙しいのよ?」

「そんな!」

「曲、欲しいか?」

「はいっ! 欲しいですっ!」

「丸山彩、『ふつうのうた』を歌うか?」

「……アイドル、したいです」

「思つたより、可愛らしい歌だぞ?」

「ほんと、ですか？」

「なにこの茶番」

「リサちゃん……。千聖ちゃんは？」

「え？ アタシが悪いの？ 『ふつうのうた』ってアイドルらしくない曲だよ？」 意外と

可愛らしい感じで好きだけど

「そうなんですかっ！ 私、可愛らしい感じで歌えますかっ？」

「いや、それは知らないけど」

「そんなー」

「さすがはリサちゃんですね。知つてる曲でしたか。日菜ちゃんは知つてます？」

「リサちーじやないから知らないよ。そうそう。リサちー？」 いつ嫁に来るのかな？

ヒデちゃんはお前なんかにやらないッ。てのをやりたいんだけど

「え？ まりなさんじやあ。……あれ？ みんなの反応が冷たい」

「彩ちゃん？ リサちゃんが通い妻しているの、知らないんですか？」 わりと有名な話  
なんすけど

「あたしはまりなさんじやなくて、リサちーを応援してるのつ。これだから彩ちゃんは  
アイドルなんだよー。ヒデちゃんのファンにも派閥があるんだから注意してよねつ」

「あれ？ アイドルがバカにされました？」

「アイドルじゃなくて彩ちゃんでしょ。アタシの話はいいからねー」

「まりなは仕事のパートナー、リサはプライベートでお世話になつております。家事、苦手なんだわ」

「まつまあ。ヒーテは忙しいから出来ないだけで、やれば出来るからさつ。……ヒーテ？  
アタシ、なんのフォローしてんの？」

「さあ？」

「私的には、友希那ちゃんとか蘭ちゃんも怪しかつたりい……。なんでもないですっ！」

## オレの歌に酔え事件。

その日の秀人は秋山澪と美竹蘭から同時に相談事があると、今井リサを経由して羽沢珈琲店に呼び出されていた。秀人の頭の中では何かを思い悩む二人が似合い過ぎていたので、特に気にすることなくアコースティックギターを背負つて入店する。今夜は年二回ある羽沢珈琲店でのディナーショーがあり、普段ならランチタイムを過ぎた時間は空席が目立つのですが、早目に来店する秀人を待ち望んでいたひとたちで溢れていた。

「あ、秀人さん！ いらっしゃいませ。今日はお願ひしますね」

「おっす、つぐみ。今日は任せろ。とりあえず、待ち合わせなんだけど

「そららしいですね。あちらのテーブル席に居ますけど……」

羽沢つぐみが指し示した店内の奥では紗夜に何かしら言われて項垂れている澪と蘭がいた。つぐみは秀人との初対面の印象を未だに引き摺りながらも、高校に通わずに働き出した秀人のことをどこか尊敬している節があり、恵まれない環境でも頑張れるひとだと思つていたりする。もつとも、秀人の軽口には未だに抵抗しているが。

「ツグツグ。なんか聞いてる？」  
「特には……。あでも、蘭ちゃんは大学でみんなバラバラで寂しく思つてるみたいで。

「バンド活動も華道との兼ね合いで時間が厳しいと愚痴を。それと、ツグツグはやめてください」

「ほーん。大学は仕方ないわな。それぞれの将来設計があるからさ。とりあえずツグツグ。カウンター席に座るから頼むわ」

「秀人っ！ こつちに来なさいっ！」

「いつものですね。それじゃあテーブル席に運びますから、ごゆっくりどーぞー」

「ちくしょーめ」

「いつつもいつつもツグツグいうからですっ」

——あっかんべー。

可愛いらしく舌を出したつぐみが立ち去ると、紗夜に呼ばれた秀人が店内のお客さんたちの視線を集めてしまう。今夜のディナーショーを楽しみにしているひとたちからは声援を貰い、チケットが入手出来なかつたひとたちからは次回のディナーショーの予定を訊かれずにゲリラライブの予定を訊かれた。とりあえず、予定が未定だからゲリラライブですとお茶を濁しながらテーブル席へと足を進めた秀人は、仁王立ちをして待つていた紗夜に着席を願つた。腕を組んで座る紗夜はひとり頷く。

「よく来たわね。秀人」

「そりや来るよ。呼び出されたし、ディナーショーもあるからね。紗夜ねえは？」

「うん？ いつも通り来たら二人が居たのよ。珍しい組合せだから声をかけてみたら、秀人に相談事つて聞いて呆れてたの。美竹さんの年齢差はひとつだからまだ分かるし、あまり気にしてないけど。秋山さんはね？」

「だから澪ちゃんつて呼ばれてるんだろ。特にリサなんか完全に妹分を見る目だからな」

「秋山さん……。失礼かもしれないけど、歳上として恥ずかしくないの？」

「実はあんまり……。その、秀人くんとかリサちゃんは頼りになるし、さわちやんもその手の相談事は秀人くんにしろつて。私もそう思つたし」

「山中さんは教師でしょうに。これだからまりなさんの友人は」

「紗夜ねえ。言い過ぎ」

「なによ？」

「それにほらつ。二人は同じ年よりも上つていうか、大人つていうか、大切な弟さんに何かするつもりでは……。すいません」

「めちゃくちゃ萎縮してんじやん。なにしてんの紗夜ねえ」

呆れた秀人が目を向ければ、瞼を閉じた紗夜がストローを咥えてアイスコーヒーを啜つている。

「その、秀人くん。迷惑だよね？」

「大丈夫よ？ 気にしない気にしない。さわちゃんがいうならオレが適任だろうしね。  
紗夜ねえはいないと思つていいから」

「秀人くん。ありがとう」

——ずっと。

「あたしはつ」

「声がでかい。落ち着きなしゃいな。蘭から話があるなんて珍しいな。曲をせがまれて  
以来じやない？」

「ごめん。あ。曲はありがとう。あたしはかなり気にいつてるから。それに、ライブで  
も盛り上がるし、悪くないから」

「どうも。気に入つてくれて良かつたよ」

——ずっと。ず。ごほつ。

「あのさ秀人。ちよつとバンド活動のことでね。秀人と話せば大丈夫つて父さんがい  
うしさ。あたしも悪くないかもつて思つて。それで。その。あの。だからさ」

「あのオヤジ。娘の相談を投げやがつたな。それと蘭。だんだん小さくなつてるから  
ね。普通の音量で頼むわ」

「ごめん」

俯いて顔を染める蘭は控え目にいつて可愛いらしく。隣に座る澪もそう思つたよう

で可愛いと溢している。まあ、すぐに蘭に睨まれて慌てるところが澪らしくて秀人は笑つた。

「細かい話はオレのランチタイムのあとでお願いね。もうすぐ売れ残りがくるから」「売れ残りとはいつてくれるね。今日も奇跡的に一食分だけ、一食分だけが残っているよ」

「おう。おっちゃん。今日はよろしく」

「こちらこそ。それよりも秀人くん。お客様の皆様がね。今日はかなりしつこく訊いてきてね。一食分が残るよう計算して注文してきただんだよ。不思議に思わないかい？」

「口笛でも吹こうか？」

「みんな。こここの会計は秀人くんに頼むからね。飲み物のお代わりとか、普段なら頼まないようなデザートとかいかが？」

「鬼畜か。まあいいか。みんなは好きに頼んでいいよ。ちゃんとギャラに上乗せさせるから。おっちゃん？ つぐみは？」

「つぐみは裏で打合せ中の月島さんたちに差し入れをしているからね。あとから来るんじゃないかな。それじゃこれ。毎度ながら、売らせて貰えなかつたランチね」「どもども。いただきます。ああ、店長。追加で注文があるわ」

「まいどあり」

追加注文をして、わざとらしくウマウマと言いながら食べ終えた秀人が二人から詳しく述べを聞いていけば、二人ともそれらしい相談事で秀人は苦笑して頷き、紗夜の眉間は寄つていった。

澪の相談事は大学の卒業を見据え、バンドメンバーから音楽関係の就職活動をすすめられて悩み、秀人から話を聞いて参考にしようと思っているとのこと。蘭の相談事はバンド活動の時間を増やしたい気持ちとメンバーの時間を大事にしたい気持ちで揺れており、どちらを取ればいいのか分からなくなつたとのこと。

「美竹さんは好きにやればいいじゃない。秋山さんは教師とか大学の先輩を訪ねるのか常識的じやないかしら。秀人もそれでいいでしょ」

「紗夜ねえ。フライドポテトあるけど食べる?」「食べる」

追加注文されたフライドポテトを秀人が紗夜の口元に運べば黙つてパクついてしまう紗夜に、蘭は呆れ、澪は笑顔になつた。

「さてさて。一人の悩み事はちゃんと聞いたから提案するけど、澪はオレのライブに裏方で参加してみようか。業界人の話なら参考になるでしょ。蘭は原点に立ち返ること。なんで音楽やり始めた? バンドやる意味は? ちょっとだけ振り返つて考えてみろ

よ

「裏方……」

「原点……」

「澪はひとりで来いよ？ 他のヤツらは普通に就職活動をするんだろう？」  
蘭だけのバンドか？ 全員が揃うからバンドだろ！」

「ひとりで……」

「みんなで……」

「お代わり……」

「はいはい。二人とも時間あるなら、ディナーショーを聴いてかない？ 気分転換も兼ね  
てさ」

『うん』

「ヒデポテトちょうどいい」

「紗夜ねえ」



ディナーショーの幕開けは秀人の近況を語るトークから始り、アコースティックギ

ターの弾き語りで進行される。こういったディナーショーは普通のライブでは味わえない距離感で行われ、ライブのチケット代金と比較すると割高になるため二の足を踏むひとは多い。秀人が開催するディナーショーは二種類あり、どちらもファンクラブ限定で抽選会と即売会となっている。抽選会は文字通りにファンを対象とした、秀人のディナーショーに参加したことがないファンを優遇する抽選形式で集められるディナーショーだ。即売会はライブ会場のみで売られる限定チケットである。どちらも転売は禁止されており、転売をすれば二度と呼ばれないことが注意されている。

順調に進んだディナーショーの前半が終わり、秀人がファンの質問に応える休憩とは呼べない触れあいの時間となる。すでに五曲も歌い終えた秀人のサービス精神は高い。普段のライブとは違うメロディの『名もなき詩』や『Tomorrow never knows』から始り、『花 — Memento Mori —』や『終わりなき旅』に『innocent world』という楽曲が秋山澪と美竹蘭の二人にも共感を覚えさせたようだ。ライブの舞台が大きければ大きいほど秀人は遊ぶが、こうしたファンと語り合う時間は秀人が大切にしている笑顔で溢れている。

「それなりに盛り上がったところで大人の時間が始まっちゃうよ。エロエロとドロドロな楽曲がやつて参ります」  
笑いかける秀人に悲鳴と歎声があがつた。

「一応ね。毎回いつてるけど、不幸な恋とか愛を応援してるわけじゃないからしないでね。……バレちゃつてやり返されても知らないよ？ 子供は敏感だからツツコミ入るし。それでもね。今。この時間だけはエロくいこうか。青春が子供の特権なら、大人だつて特権がある。オレの年齢は公然の秘密だからツツコミはいらないくつて。そこ。そこにいつてるの。ダメ」

いろいろと考えていた秋山澪と美竹蘭にも笑い声が移つたらしい。

「笑いもそれたし後半にいくよ。結構ね。評判いいのよ、大人の時間。大人の音楽。帰つたら旦那とか嫁を見る目が変わつたなんていわれるしさ。離婚の報告しちやうファンもいたけど、みんなは大丈夫？ ……おう。若干名の顔が心配だけど帰つたら抱き締めればいいんじゃない？」もう歌うよ。許された大人の遊び」

——オレの歌に酔え。

そこから流れる楽曲は良くも悪くも秋山澪と美竹蘭を揺さぶつた。『色彩のブルース』で始まる大人の遊びは『DEAR BLUE』と『NITE &amp; DAY (NEW TAKE)』に『強く夢い者たち』と続いて濃くなつていく。また『ここでキスして。』と『One more time, One more chance』が歌われれば、言葉にならない感情に支配されていくのが見てわかる。実は全身を赤く染めているのは秋山澪と美竹蘭以外にもいて、初な反応をしている羽沢つぐみだつたりす

る。年頃の娘の親としては心配しながらも期待していたりするのだ。婿を。

それなりに静かでいながらも確かな熱量が込められたアンコールを受けた秀人は『未完成』で語り口を変える。『セロリ』で盛り上げて『歩いて帰ろう』で幕を閉じかけたが、羽沢つぐみを呼び出して『サプライズゲスト』だと口にした。父親の秘密主義は娘に伝染したらしく、内密に練習した楽曲を披露したのだ。秀人がコーラスに回り、キーボードの羽沢つぐみが歌い出した『未来へ』は父親だけでなく、美竹蘭の涙腺にも直撃した。号泣である。そこから羽沢つぐみもキーボードの演奏で参加し、秀人が歌う『千本桜』と『くちばしにチエリー』は万雷の拍手を貰い終幕となつた。

後に幾つかの夫婦が円満に離婚したと報告が続くようになつたのは、秀人だけのせいではないが、間違いなくキツカケを作つたひとだと言われている。それでも、大人の遊び、音楽は多くの声援を貰い今も続いていき、秀人の歌に酔いしれるのだろう。

——語り手、月島まりな。

## Music Star Channel 04

「それで？ なんでの流れで『はじめてのチュウ』を歌わされたの？ 『お料理行進曲』もいつとく？」

「思い出すからやめて」

「笑うなよ。北沢のお気に入りだぞ。コロッケ作れちゃうよ？ 二番はナポリタンだけど」

「ちょっと無理」

「ね？ ヒデちゃん。お店で流れてるアレ、気になつてたんだけどヒデちゃんが犯人だつたの？」

「オレが悪いわけじゃないよ？」

「確か、コロッケで有名な精肉店ですよね？」

「そだよ。公園で子供らと歌つて遊んてるときに北沢が来てね。そこで聞いて気に入っちゃつてさ。使用許可貰いに両親を引っ張つてきて驚かされましたなー。コロッケ持参。しかも大量。許可出したらお礼もコロッケ山盛りだつたからなー。食べるのしない」

「結局食べきれなかつたもんね。いろんなひとに配り歩いたビデがぐつたりしてたし、連絡貰つて飛んで来た紗夜ちゃんがひたすら食べてたのを思い出すから笑っちゃうんだよねー」

「生き返つたよ？」

「生き返つたよ？」

「か、可愛いつ！ キュンキュンしましたつ！ しましたよ秀人くん！ 可愛い歌ですねー！」

「そだねー。ライブでは英語だし、もつとロックにやつてるから新鮮だつたかな？ ア

コギで日本語の歌詞は

「はいっ！」

「歌う？」

「歌いません！」

「そつかー！」

「ちよつと笑うからやめて。彩ちゃん？」

「違うんですよー。私はまりなさんのパワフルな感じとかしんみりする感じので、可愛いくなる感じのがいいんです。お願ひしますっ！」

「難問かな？」

「ヒデさんの単独ライブにはパスパレの皆で行きましたからね。私以外の皆は単独ライブでのまりなさんの歌が印象に残ったようですよ。私自身は澪さんですけど」

「まりなさんの歌もどんどん上手くなつてるからね。アタシは『夢を信じて』よりもさ。『Yes! I Will...』が泣きそうになつたよ」

「いいですよね、まりなさん！」

「あたしは『ブルーウォーター』でワクワクしたよー」

「私は澪さんの『陽のあたる坂道』と『本日ハ晴天ナリ』に驚きましたね。そういうえばヒデさん。もうまりなさんは恒例ですが、何で澪さんも歌つてたんですか？」

「澪？ 濱はなあ。それなりにバンドで歌つてたから大丈夫だろー。そんな感じで。崖から飛ばしてみた」

「無茶ぶりしてるなー。単純にヒデもベース弾きたいとか休みたいとか、そんな理由でしょ」

「それもある。まあ、知つての通り、オレの頭の中には女性ボーカルの楽曲もあるからさ。いい感じの声だから歌えつていつたな、うん」

「なるほど。ヒデさんのベースも新鮮でしたが、これからも弾くんですか？」

「うん？ ちよくちよく弾いてるけど」

「男祭りのライブだけでしょ？ ヒデのベースは」

「アレだけだつけ？ どつかで弾いてなかつた？」

「ヒデちゃんはライブばかりやつてるからだよー。もつとおねーちゃんと遊んでもいいんだぞー。かまえー」

「うーん。思い出せん」

「ヒデちゃんかまつてー」

「はいはい。頭を撫でてあげよう

「わーい」

「日菜ちゃんの茶番は置いといて。あの。リサちゃん？ さつきから指示きますよ？」

「あ。千聖ちゃんありがと。なにこれチラシ？ はい？ この番組に台本なんてあつたの？ アタシ貰つてないんだけど。しかも紙一枚じゃん。三行目？ ゲストへの質問……。そうじやん、ゲストじやんパスペレは。なんでこっちの話題で盛り上がつてんのよ」

「私たちのほうがメディア慣れしてますからね。露出が少なすぎるヒデさんに質問したほうが喜ばれると思いました」

「アイドルですから」

「彩ちゃんは関係ないかな。千聖ちゃんの気遣いはありがとう。でも、ゲストだからさ」

「私、アイドルですかから！」

「アイドル？　だよねー」

「軽い！　リサちゃんが軽いですよ、ヒデくん！」

「そつかー」

「もつと軽かつたつ！」

「彩ちゃん今邪魔しないで」

「マジな感じでいわれてしましましたよ。ちょっと泣きそうになりました」

「笑わせにくるのやめて」

「リサちゃんがひどい」

「そうですね。パスパレとしては問題なく活動を続けていきますので、これまでと同じようにテレビや雑誌、Webなどのメディアで目にすると思いますが、今後も応援をよろしくお願ひします。そんなところで視聴者からの質問です」

「千聖ちゃん？　へるぶみー。アイドルが笑われてるぞー」

「——ベンネーム『山びこちゃん』からいただきました。ありがとうございます。『ヒデさん。単独のドームライブ、とっても楽しかったです！　いつも楽しんで歌つてるヒデさんを応援しているのですが、小さいライブハウスではガラリと印象が変わると聞きました。うちの地元にはまだ来てないので予習の意味を込めて教えてください。PS、ま

りなさんは『ごちそうさまでした』とあります、そんなに印象が変わったんですか？　ステージの規模で楽曲を変えているのは聞いてましたけど

「次回のまりな伝説も期待しよう。オレもしてるからな。……雰囲気？　変わるな。かなり変わる。ライブハウス自体の雰囲気に楽曲も合わせるぞ。ガラの悪い昔ながらのライブハウスとかなら、ガンガンにうるさいロックをやる。ドームみたいなメジャーナラメロディを気にしながら思いきり遊ぶ。デイナーショーとかなら年配が多いから弾き語りが中心で大人の音楽だしな。そんな感じで変化をつけてるぞ」

「そうなんですか。だからファンの年齢層が幅広いんですね。レパートリーが豊富にあるのは強みですよねえ」

「素直に感心してるとこ悪いんだけどね。アタシたちがMCだからね」

「それはすいません。——またメールをいただきました。ありがとうございます。ペネーム『まりなさんをください』さんからいただきました。『単独ライブ行けませんでしょ』。悔しいです。恒例のライブビデオを全裸待機しまーす。ヒデさんへの質問はー、ライブに参加できないファンのためにライブビデオを販売していると、どつかの雑誌で読みましたー。いつから始めたんですか？　P.S.、まりなさんもいいけど噂の澪ちゃんのファンになりたいので早く見たいでーす』とありますが、確か、デビュー前からライブビデオを作つてましたよね？　今の時点でどれくらいあるんですか？」

「まりながら乗り換える発言はスルーか。まあいいけど。割りと最初から作ってるから数百はいつてるな。初めはアルバムの予算よりライブだ！ そんな感じで予算削減のためにアルバムじゃなくてライブビデオを出してたからな」

「普通なら逆なんですよ？」

「わかつてることさー。レコードイングは時間の拘束がキツくてね。そんな時間あつたら練習してライブしたほうが楽しいじやん。幸い、知名度も上がったし」

「話題にはなりましたよね。ミュージックサイコパスがいる、みたいな評価でしたが『控えめなフォローありがとう。音楽気狂いとかライブジャンキーとかが当時のあだ名か。まあ、間違つてないわな。うん』

「近場のライブハウスを荒らし回つてさ。出入り禁止になつたからアルバム作つたんだよねー。アタシはヒデの頭を疑つたよ？ レコードイング途中に笑い出してさ。貯めたライブビデオをネットに流し始めて『○○ライブ、これで出入り禁止』のコメント貼つてさ。頭おかしいのがいるー。みたいな評価コメントで溢れてたからね。同感でーす

☆

「リサも笑つてただろ？」

「いや笑うよ？ でも湊社長の顔は青かつたからね」

「確か、そこでまりなが『ライブビデオをきちんと売れる物にしよう』とかいつて、湊の

オッサンは救われた顔をしてたなー。思い出した

「だよねー。『ファーストアルバムよりも先にライブビデオから出すかつ』て、ヒデが  
いつてから、また青くなつてたけどねー」

「そうだつけ?」

「そうだつたよ」

「たまに思いますけど、一緒に居ないことあるんですか、貴方たちは」

「お? 素が出たな」

「ん? 素が出たね」

「このバカツプルめつ。リサちゃんはヒデさんのダメダメな私生活にキュンキュンし  
たつて暴露してやりましようか? このダメンズ好きめつ!」

「ちょつ」

「ヒデさんなんか浮気前提のハーレム野郎になつて刺されてしまえばいいんですよ。こ

れでもかと滅多刺しでつ! なんなら私が刺しますからねつ!」

「荒ぶつてんなー」

——あの。曲の準備できましたけど。

「あいどる……」

「あたしがヨシヨシしてあげるねー」

# オレの夏祭り事件。

とある日の秀人は誘われた夏祭りに演奏で参加するため、約束の時間に遅れている  
田井中律たいなかりつと秋山瀧あきやまみおを出迎えに来ていた。秀人が彼女らと会うのが二回目とはいえ、初対面で打ち解けていた律は明るかつた。

「あ、秀人だ。おいーす！」

「ごめん！ 遅れたつ！」

「おいーす。連絡は貰つてるからあんま気にすんなよ。つかさ、りつちゃん隊員。エンジヨイし過ぎじやね？」

「いやあ、久しぶりの夏祭りだからワクワクしてきてな！ お前にもなんかやろうか。  
あんま美味しくないたこ焼き、あんま甘くないたい焼き、微妙に半生のお好み焼きから  
選ばせてやろーじゃないか。どれがいい？ 遠慮すんなよー？ なんなら全部食うか  
？」

「ただの罰ゲームだろうが」

「律……。まずは秀人くんに謝ろうな」

道に迷ったはずの律は両手の食べ物を掲げて見せ、頭にはテレビで放映中の戦隊もの

の怪人の仮面が付けられていた。横で呆れている澪の頭にも仮面があることと、左手に握られているワタアメに気付いた秀人は見なかつたことにした。

「連絡は貰つたが時間は押してくるから急ぐぞ。そ、れ、と。関係者に謝るさわちやんの顔は見物だつたなー。軽音部の後輩を連れてきたさわちやんの気遣いがなー。大学でバラけた先輩や後輩が久しぶりに揃う手筈をさわちやんがしてくれたつてのに、今の誰かさんを見たら怒りそーだなー」

「うへえ。マジかよう」

「律……。しつかり謝ろうな」

「りつちやん？ 諦めろん」

「うへえい。なあ、澪。秀人も。このまま遊ぶ選択肢なんて……」

「律。急ごう。絶対に怒つてるぞ」

「ないですよねー。ああ、唯。どうしてお前は肝心なときに居ないんだ。お前がいれば

さわちやんの怒りが分散されるのに」

「目覚まし時計を一時間早くかけたからな。梓から電話貰つただろ。いい加減に覚悟を決めろッ」

「ムギもムギだぞ。妹分が気になるからつて先に行きやがつて、て痛ツ」

「いいから急ぐぞツ！」

澪から拳骨を貰つた律がブツブツと文句を言いながらも先頭で案内をする秀人の背中をみて思い出した。

「そういやさ、澪。お前の服装つてさ」

「なによいッ」

——秀人のロツクなヤツに意識しちゃつた？ なんて訊いたら沸騰しそうだな。こ

いつ。

「オラア。急ぐつ！」

『はいッ！ すいませんでしたッ！』



祭り会場の待機テントで仁王立ちをしている高校の教師である山中さわ子に対し、正座をして謝る律と澪の大学生二人に周囲は苦笑いだ。ギターのチューニングをしていた、いろいろと小さい高校三年生の中野梓は平沢唯に抱き付かれながらも優しい顔をして呆れている。その横で唯の妹である高校三年生の憂が笑顔で手を差し出してチューニングを代わろうとしていた。平沢姉妹はよく似た顔であり、氷川姉妹とは逆の関係だとみて分かる。マイペースで天然の唯、しつかり者の憂であつた。

もはや説教ではなく、日頃の愚痴が出ているさわ子からヘッドロックをされてる二人に温かな笑みを向けるのは育ちの良さが隠れきれない琴吹紺ことぶきつむすであり、隣にいる金髪碧眼の美少女が紺の妹分になる齊藤董さいとうすみれだ。董は琴吹家の使用人の娘でありながらも、紺と本当の姉妹のように育つたと秀人は聞いている。そんな董は笑つてもいいのか迷つてゐる様子だった。その後ろで静かに立ちながらもチラチラと視線を投げてゐる董の同級生である高校一年生の奥田直おくだなおと、大学生になつても変わらない先輩たちに笑つている高校三年生の鈴木純すずきじゅんがいる。

同じ大学に進学した大学一年生の先輩たち四人と、軽音部の後輩である高校生たちの仲は良い。軽音部の先輩バンドの『放課後ティータイム』と後輩バンドの『わかばガールズ』の舞台が始まる前であつても怒りを沈めないあたり、顧問であるさわ子との関係も昔から変わらないようだ。

「秀人くんすまない。少しまずいことになつた」  
「湊のオツサンか。どした？」

「他の皆さんも落ち着いて聞いてください。予定していたバンドが来ていません。どうやら連絡もとれない状況みたいです」

湊社長に続くように口を出した真鍋和まなべのぶは県外にある大学から帰省していいたタイミングで平沢姉妹に巻き込まれたらしく一緒に來ていたが、到着してすぐに騒ぐ幼馴染の唯

を放置してスタッフに混ざり始めた。こういう機会でもなければプロの裏方の仕事を見れないからとは和のセリフである。唯自身がプロのミュージシャンになるかは分からぬけど、微笑みながら続けた和に秀人は感心して頷いたものだ。和よりも一年後輩にあたる、どこかの世話焼き幼馴染とは役者が違うなと秀人は思った。

和の三歳も下である秀人が思考を明後日に飛ばして遊んではいるが、欠片も心配しない湊社長の顔を見て我に返った。湊社長はトラブルを歓迎してはいなが、楽しんでいる雰囲気がある。驚きのまま固まっている周囲とは場数が違うのだ。

「まあいいか」

「秀人くん？ なにかかるかい？」

「関係ない考え方してたわ。オツサン。そいつらのタイムテーブルは？」

「居ないバンドの時間は七十五分だね。もちろん、アンコールの時間をいれてだ」

「長えな」

「彼らもプロだからね？ 違約金が痛いだろうけど彼らの出番は後回しになるだろう

さ」

「ずらすしかないと。オツサンの見立ては？」

「厳しいね。あちらの状況が分からぬのが痛い。事件か事故か。遅刻か欠席か。トラブルなのは間違いないだろうけど

「ほーん。ファンの数は？　告知はしてんの？」

「それなり、かな。Webで告知はしていたようだよ。出演のね。まとまつた集団が困惑していたからファンだと思う。百には届かないよ」

「百名以下のファンの不満ね。年齢層は？」

「さすがに若い。中心は二十代だよ。なかなか気合の入ったパンクな格好をしてるね」「なるなる。穴埋め三曲やつてMCいれてみつか。他の客層は？」

「そちらはバラバラだね。主なのは三十代家族連れ、十代後半から二十代前半の学生さんかな。一番高いのはお孫さんを連れたお婆さんだと思うよ。それで秀人くん。そろそろ考えは纏まつたかい？　楽曲はどうする？　あちらのファンを奪つて恨みを抱えたくはないよ」

「パンクは外すさ。言い訳は機材トラブルな。誰かにまりなを呼びに走らせて、アコギと拡声器を用意させてくんない？」

「すでに持つてきたわよ。さわ子先輩まで固まつてどうするんですか。それで秀人。どうするか決めたの？」

「さすがまりな。ありがとさん。オレがやることは決まつてるさ」

——ライブジャックだ。

そこからの動きは濁の目からみれば信じられないほどに速い。動き回るスタッフに

指示を出して いる湊社長は 演奏でも裏方でも 経験値のある大人だから 素直に 納得しているが、 中心にいる秀人は生意気な 雰囲気のある 年下の少年なのだ。さわ子に紹介されたときには その年齢で プロデビューをして いると 聞いて 驚いたものだが、 現状をみればさわ子が 自慢気な顔をして いた理由も わかつた。

「これが プロの ミュージシャン……」

「だな」

「律」

「見ろよ濬。あちこちから 偉 そうな オッサンが 駆け込んで 来てるしさ。初対面から 話しやすい ヤツだとは 思つてたけど、 あたしらとは 違うわ。演奏も 凄いけど 顔が プロして いるもんな。偉 そうな オッサンたちに タメ口 だしよ」

「そうね。こう いう トラブルにも 慣れて いる 雰囲気があるし、 経験値が 高い、 そんな感じが するわね」

「ムギ」

「余裕を感じるから 大丈夫なんだよ、 きっと。私たちは 私たちで スゴいの しないとね。ガンバるぞー」

「唯」

「あんたたちが 秀人より 凄い ライブなんて 無理だからね。あんたたちは あんたたち。自

分たちらしい演奏をしなさい。あつちはプロなんだから」

「さわ子先生」

「もう先生じやなくていいわよ？ あんたたちは卒業したんだから」

「さわちやんのバカ！ もつと応援しろー。なんかこう、あるだろツ」

「してるじやない。りつちやんガンバ！ あんたたちのライブはビール片手に応援するゾ」

「ぜつてーバカにしてるゾ」

「はいはい。ちよつとまりな。彼女たちの出番はどうなるの？」

澪たちから離れたさわ子が秀人の側にいるまりなに近寄って会話に参加している。

「澪先輩……」

「凄いな梓。もう打ち合せが始まってる。このトラブルも秀人くんには何でもないみたいだ。演出に利用するらしいぞ」

「そうですね。こういうのがプロの仕事なんでしょう。秀人くんには驚かされてばかりです」

「さわ子先生がいきなりだもんな。昔のツテで凄いのとライブできるつて引っ張つてきてさ」

「信じられない日でみた私たちに即興で弾き語りですかね。度肝を抜かれました」

「疑つてたのは皆じやなくて梓だろ？ 秀人くんの同い年だと思われたの、まだ気にしてたのか」

「してません！ 滝先輩も準備しますよ？」

「まあまあ。さわ子先生を待とう。何か変更があるかもしない」

「そうですか。分かりました」

「あづにやーん！ 一緒にチューニングしょー」

「唯先輩？ はあ。分かりました」



出番が繰り上げされた『放課後ティータイム』と『わかばガールズ』の演奏は無事に終わり、全力を出し切った達成感が抜けないまま、待機テントを抜け出した私たち軽音部は客席に走った。迫る時間に耐えているスタッフたちの顔を笑顔へと変えた秀人のライブが始まろうとしているのだ。

『ういー。H i d e ドース。機材トラブル？ らしくてさー。マイクも死んでやんの。拡声器でごめんねー』

——ええええ——

『あ。オレを知つてゐるひとがいるな。笑い声が混じつてたぞ。オレのことを見つけてるひとー』

秀人が左手を上げると釣られるように上がる手がチラホラと客席にあつた。

『年齢層バツラバラ。デビューして一年目の新人よ? ネットにはデビュー前から流れてるけどさ。ちなみに事務所も一年目ね。立ち上げたばかりの会社だから社長も新人なのだよ。あ。所属アーティストはオレだけだから、検索しても意味あるかなー』

笑い声が観客から上がる。中にはネットでみた動画を叫んでいたひともいた。

『なんか喋つて時間を使え。そんな指示を無視して歌つちゃおうかなー』

——歌ええええ——

『ノリがいいな。アカペラになるよ? アコギあるけど騒いだら聞こえないよ?』

——歌ええええ。アコギイイイ。静かにいい——

『そんならアコギで一曲やつて様子みるか訊こうと思つたら片手に拡声器持つてるよ。あ。マイクなおつたの。なら『少年時代』と『自転車泥棒』を歌いたいんだけど。バツクバンドのみんなイケる?』

それぞれの楽器が鳴らされて流れ始めるメロディに観客が酔いしれる。どこか切なく、どこか温かい二曲を続けた秀人は歌い終わつたマイクを横に拡声器を持ち上げた。

『なんかさ。最後のバンドがトラブつて来れないらしいぞ。スタッフが大騒ぎしてる』

彼らのファンらしき集団が叫んでいる。

『てえ、こお、とお、はあー』

拡声器を置いた秀人は走ってきたスタッフからエレキギターとアコースティックギターを交換してマイクを握った。

「こつからはオレの夏祭りだつ！ 調子変わるよ？ 盛り上がつちやうよ？ 真つ赤な二曲。始まりは『赤いタンバリン』だッ！」

音楽を聴かせていた秀人のライブの色が真つ赤に染まる。盛り上がる歓声に��けと『Red fraction』で赤く攻めた。最後になつた『空色デイズ』で色の付いたライブは幕を閉じ、盛大なアンコールが始まつた。五分は経過しただろう。

『きちやつた』

一度引っ込んだ秀人が拡声器を片手に月島まりなと腕を組みながら会場に戻ると悲鳴に似た歎声があがる。

『月島まりな、歌わせます。『創世のアクエリオン』です』

——これが後に語られるまりな伝説の序章『月島まりな強制されたデビュー』である。顔を真つ赤にして歌いきつた月島まりなは走つて舞台袖に消え、私は全力で惜しみない拍手を送つた。私がその立場にいれば、絶対に歌う前に逃げ出すからだ。

無理やり歌わされた月島まりなの可愛らしさと、繰り返された『愛してる』が頭に残

る観客に秀人は『スターな男』と『ヒゲとボイン』で三十代の観客の心を掴み、『素晴らしい日々』と『ありがとう』でその場の全員の心をひとつにした。

このライブが秀人のバックでベースを弾くキッカケになるとは、当時の私はひと欠片も想像していなかつた。ましてや、歌まで歌わされるとは。

——語り手、秋山澪。

## Music Star Channel 05

「なんで弦巻のPVが完成してんの？ しかもさ。オレがお願いしたの、この二曲じゃないよね？」 違うの流してるよね？ あのアホ大丈夫か？」

「ビデ？ こころちゃんだけじやなくて、ハロハピのみんなのミュージックビデオだから間違えないでね。それについても完成度高くない？ アタシたちも頑張ろつ。Roseliaのみんなつ、頑張ろうねー」

——スponサーだからごり押し、とか？

「まあ、確かに。……」の番組のスponサーはツルマキグループとコトブキカンパニーでお送りしております。いや、本当にお世話になつております。このタイミングでいうことじやないけど、オレからもお礼を、本当にありがとうございます」

「ね？ さつきから、あずにやんの会話の声が入つてゐるの。なんならこつち座つて喋る？」

——ごめんなさい。

「いやいや、どつちでもいいけどさ。オレが協賛にお礼をいつてるんだから静かにしろよ」

「それでヒデ。こころちゃんがなんなの？」

「……まあいいか。オレが弦巻に楽曲を提供したのは昨日だ。一晩で完成させてるんだぞ？」  
「ヤバくないか？」

「ヒデちゃんが折れた？」

「折れましたね」

「ヒデ……。ハロハピだよ？」

「すまん。やべーヤツらだつたの忘れてたわ。なんか倒れ伏すミツシエルが頭に浮かんだぞ。うんと美味しいヤツでも食わせて労うか？」

「いやあ、休ませてあげない？ それが一番の栄養でしょ？ きっと時間を忘れて寝てるつて

「だな。そつとしておこう」

「かかつ、可愛いいいい」

「うるさつ」

「なんですかヒデくん！ めちゃくちや可愛いじやないですかつ！ この二曲つ、くだ  
さいつ！」

「彩ちゃん……。今の話聞いてた？ 『帰り道』と『恋愛サークレーション』はハロハ  
ピに提供されてるんだよ？」

「もう丸山は『プレパレード』でいいだろ。あとは事務所で会議でもするからさ。この話は終わりね」

「えー。そんなー。可愛いのがいいですう」

「頭悪そだからな。その喋り方」

「ひどい」

「イラツとした。『みかんのうた』を全力投球で歌わせるぞ?」

「ミカン? リンゴとかイチゴはないんですか? そつちのほうが好きですね。オムライスとかハンバーグならもつといいです! そんな感じの歌とかありませんか?」

「あー。『バニラソルト』なら浮かんだ」

「ヒデくん! ……ソルトってなんでしたつけ」

——塩です。

「丸山あ。拳手して訊くことじやないだろうが。梓も椅子持つて来い。こつちで喋れ。  
あー。なら『甲賀忍法帖』か『愛をとりもどせ』を歌わせるか。選べ丸山」

——ごめんなさい。静かにします。

「名前に不安を感じますよ……。イヴちゃんが喜びそうなのがありますけど。ここ  
はあえて、そうつ。『みかんのうた』でつ! それでヒデくん。どんな感じの曲ですか  
?」

「めちゃくちゃロックで」

「ほうほう。ロックで？」

「めちゃくちゃ叫ぶ感じで」

「ええ。叫ぶ感じなんですか」

「ジャンルでいうならメタル。ヘヴィメタル」

「嫌ですよっ！ まあ。ヘヴィメタルは私でも知つてますけどね。……ヒデくん。無理っすッ！ 私には早すぎますし、アイドルじやありませんねー。私はもつとアイドルしたいのですよ」

「そつかー」

「軽い！ 他にないんですか？」

「じゃ会議な」

「あつはい。真顔には勝てませんね。仕方ない仕方ないですよ」

「落ちがついたところで視聴者からの質問です」

「千聖ちゃん？」

「彩ちゃん。そこでしばらくしょんぼりしてなさい。——ペンネーム『ビデロックが止められない』さんからいただきました。ありがとうございます。『とっても楽しい単独のドームライブでしたが、恒例かもしれないアンコールでの新人紹介で、おひとり様、忘

「おでまんか？ 居ましたよね？ おデコちゃん？ おデコさんが。 いつたい誰のおデコなんですか？ わたし気になりますつ。 P.S. 中々いいドラムでしたので応援します！」とあります。これはあれ、律さんですよね？」

「んだ。りつちやんだ」

「えつと。ヒデさんが説明する気がなさそうなので、私が知つてゐる範囲でお話しますが、律さんは澪さんの親友、幼馴染の女性です。澪さんと同い年ですから私のひとつ上ですね」

「年齢は公開してないんじやー」

「なにしてんの、りつちやん」

「梓が行かないならあたしが行くべきだと思つた。あと、余つてるケーキが食べたい」「卑しん坊め。食べてしまえ」

「ははー」

「……本当にケーキを持つて居なくなりましたよ。いいんですか？」

「りつちやんはね。就職活動に失敗してコネでうちに入社したんだ」

「はあ」

「りつちやんはね。特になんの仕事も出来なかつた。だから勤務時間の間ずつとドラムを叩かせた。そりやあもう、ひたすら叩かせた。出勤してドラム。昼休憩のあともドラム

ム。帰宅前もドラム。休日明けは勿論ドラムだ。りつちゃんは入社してからずっとドラムを叩き続けた……。そんな苦難を乗り越えたからこそ、りつちゃんのおデコとドラムはライブで輝いたのさ。君もりつちゃんのファンになつて隊員になればいいよ」

「何の話ですか」

「りつちゃんのファンだから、りつちゃんを応援し隊の隊員？　うちの事務所内に何人かいるぞ。ライブ間近のりつちゃんは泣きながらドラム叩いてたからな。応援する側にもりつちゃんの熱意が伝播したんじやないか。あいつら隊員はライブのりつちゃんをみて泣いてたし」

「だから何の話ですか」

「あたしも読んじゃうよー。——ベンネーム『巣昆布だつてお菓子だもん』さんからいただきました！　ありがとねー。『ヒデさんヒデさん。相変わらずのライブ、ちょーカッコ良くて、ちょー楽しかつたです！　次回も仕事をサボつて駆けつけたいと思います。ところでヒデさん。アンコールの一曲目なんですが、女性陣で歌つてましたよね？　ひとり分声が多くないですか？　まりなさんの声は耳が覚えてますし、新人の澪ちゃんは把握しました。ひとり多いですよね。いつたい誰なんですか？　P.S、巣昆布は好きですか？』だつて。これもりつちゃん先輩？」

「んだ。りつなんだ。『JUST COMMUNICATION』の評判よさげだよ

な

「仕事はちゃんとしましょう。きちんと休日を申請しててくれたほうが私は嬉しいです」

「どっちでもよくない？」

「よくないです。ヒデさんがそう言うことを発言したら、ファンの皆さんガサボつて来るじゃないですか。気をつけてくださいね」

「あつはい」

「怒られてやんの」

「リサ。MC乗っ取られてるぞ」

「あ」

「私も読んじやうねー。——ペンネーム『まりなさんに踏まれたい』さんからいただきましたー。そつかー。がんばれー。内容はね。『あちしがヒデさんのファンなのは常識ですけど、まりなさんのノビのある歌声の『Little Bustlers!』が最高でした！ヒデさんの単独ライブに違和感なく混ざるまりなさんに続けといわんばかりの澪ちゃん！澪ちゃんの歌声も良くて、どちらに踏まれるべきかあちし迷いますっ！」

「そんなあちしからヒデさんに質問です。あんまりお休みがないヒデさん、休みが丸一日あつたら何をしますか？ 音楽以外のヒデさんの話も聞きたいですっ！」なんだつ

て。……びーえす、ヒデさんがプロデュースする彩ちゃんもみたいですよ！　だつてよ？」

「丸一日かあ。とりあえず寝るわな。うんで起きたらボケツとタバコ吸つてコーヒー飲んで寝る。うんでもまあ、起きたら酒でも飲もうかね。ついでにギター弾いて歌うわ」

「ヒデ？　ご飯は？」

「あ。食べる」

「そんなんだから顔色悪くなるんだよー。きちんと食べて身体も動かさないとね」

「あつはい」

「びーえす、ヒデさんがプロデュースする彩ちゃんをみたいですよ！」

「昨日は？　朝見たら残つてたけど？」

「あー。昨日な。外で食べたわ」

「アタシに連絡なかつたなー。レコーディング以外なんかあつたつけ？」

「びーえす、ヒデさんがプロデュースする彩ちゃんがみたいでーす」

「会議。ライブビデオの確認して、次のライブのコンセプトの話し合いが主だな。あ。提供した楽曲の進捗にオレ自身のアルバムの報告もあつたわ。その流れで事務所のヤツらと打ち上げ。そんで、外食」

「連絡は？」

「まりなか濡からいかなかつたか?」  
「貰つたけどさー。アタシはね。ビデから貰いたかつたなーなんて。お疲れなのは知つ  
てるけど、ね?」

「氣をつけるわ」

「アリガト。忙しいのは分かるけど頼むね」

「うい」

「日菜ちゃん。これで恋人じゃないんですか? 会話が夫婦なんですけど」

「まだみたいよ? あたしは慣れたけど、恋人みたいなイチャイチャじゃなくてさ。子  
供がいそうな家庭の会話だと思わない?」

「びーえす……」

「後で会議」

「あつはい。真顔には勝てなかつたよう」